

私の研究課題・分野

私の研究課題は、シュムペーター(Joseph Alois Schumpeter)の経済発展の理論(特に革新の理論)、景気循環論などをレッツシュ(August Lösch)の立地の一般均衡理論(立地の均衡)―私は、当該理論体系に対して若干の修正を試みている―さらには経済地域の理論(この中に彼の中心地理論が含まれている)の中へ導入することを中心に自身の体系を構築することにある。その理論体系の展開の際、クリスタラー(Walter Christaller)の中心地理論も基盤に据え利用する。

シュムペーターの体系は、提唱者であるワルラス(Marie Esprit Léon Walras)に代表される一般均衡理論(厳密にはシュムペーターの静学〈後になって循環の流れの理論と呼ぶようになる〉)であり、これは一般均衡理論よりも範疇が広いを動学化したところに意義があるが、空間の概念が入っていないところに欠点が存在し、レッツシュの体系のはじめのものは一般均衡理論に空間の概念を導入したところに意義があるけれども、時間の概念が入っていない、すなわち動学化されていないところに欠陥が存在する(レッツシュの経済地域の理論も基本的には静態〈理〉論である)。

■経済地理学
■経済立地論 II



北條 勇作

(ほうじょう ゆうさく)

1947年生まれ。早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻修士課程修了、青山学院大学大学院経済学研究科経済政策専攻博士課程単位取得。学術博士〔論博(新潟大学)〕。高崎経済大学講師・助教授を経て現在同大学教授。単著に、『シュムペーター経済学の研究』、『経済地理学』、『経済学の一方向』がある。

したがって、シュムペーターとレッツシュの両理論体系は、もちろん共通点として、静態理論である一般均衡理論を土台・基盤にしてそれぞれ構築されている点である。それゆえ、シュムペーター経済学とレッツシュ経済地理学(具体的にはその大半は経済

立地論から成る)の両理論体系を中心にして両者などを体系的に総合・統合することが可能になり、空間の概念の入った静態理論を動学化すること、すなわち空間の概念を導入した静態理論を動態理論にまで高めることができるようになる。言い換えれば、空間の概念を導入した一種の動態理論を構築すること、すなわち空間(立地)の静態理論を空間(立地)の動態理論にまで高めることができるのである。これが北條モデル〔新経済地理学(neo-economic geography)の一体系(立地と関連した諸内容を特に新経済立地論(neo-economic location theory or neo-theory of economic location)と呼ぶ)〕である。

(推薦する図書〈紙面の都合で3冊のみ紹介する))

塩野谷祐一、中山伊知郎、東畑精一訳『シュムペーター 経済発展の理論』岩波書店、1980。

篠原泰三訳『レッツシュ 経済立地論』大明堂、1968(初版)、1971(第2刷)。

江沢讓爾訳『クリスタラー 都市の立地と発展』大明堂、1969(初版)、1976(第3刷)。